

環境保全のボランティア体験講座 2026 第 2 回講座レポート

第 2 回目の講座は 6 月 21 日(日)に大阪府豊能郡能勢町歌垣地区での開催です。

右の写真は出発前の集合の様子です。この日の受講生は 18 名。昨年度の受講生 1 名も、修了要件に関わる対応のため加わっての開催となりました。雨天対応のプログラムも準備していましたが、なんとか天気が持ちそうだったため、基本的には予定どおり進めることとし、最終判断は現地で行うことをお伝えしました。スケジュールの確認と活動時の班分けを終えた後、貸切バスに乗り込みました。



目的地へ向かう途中には通行止めの区間があり、移動経路上で皆さんにお伝えする予定だった注目ポイントをご紹介できなかった心配されましたが、迂回路を利用することで予定どおりお話することができました。そこで説明したのは、1900 年代に進められた複数のゴルフ場開発により、里山が後退していったという内容です。里山の減少は、木材利用の変化だけでなく、地域住民の高齢化や人口減少など、さまざまな要因が重なって進んできました。今後の連続講座を受講するにあたり、こうした里山を取り巻く現状をあらかじめ認識していただくことが重要であると考え、職員自身の経験も交えながらご紹介しました。

現地の駐車スペースにバスを停車後、今回お世話になる歌垣 SATOYAMA 楽舎まで、わずかに徒歩で移動しました(写真左下)。この地域特有ともいえる栗の木が多く見られる独特の風景の中、すでに気分が高まっている受講生の姿が見受けられました(写真右下)。



左下の写真は歌垣 SATOYAMA 楽舎の代表を務めておられる湯浅淳子さん(左から2人目)のご紹介をしている様子です。その後母屋に上がらせていただき、はじめに PowerPoint によるミニ講座で、能勢町や活動地のご紹介がありました。



湯浅さんは 2017 年にこの地へ移住され、築 250 年を超える古民家の維持・管理を続けておられます。講義では、能勢町の概要や 2025 年から始まったネイチャーポジティブに向けた助成事業の動向について紹介いただきました。さらに、保全地の主人公ともいえるキマダラルリツバメやハリブトシリアゲアリといった生きものの生態、そしてシンボル種を定めて保全活動を展開する意義について学び、受講生にとって地域の自然環境と保全のあり方を考える貴重な機会となりました。



この後、午前中の畑作業に向かうため母屋を出ると、受講生たちが何やら一か所に集まっていました。近づいてみると、そこにいたのは烏骨鶏(うこっけい)です。ちょうどその時、湯浅さんが産みだしたの卵を見つけられ、受講生に披露してくださいました。思いがけない出来事に、受講生たちは興味深そうに卵をのぞき込み、里山の暮らしを身近に感じるひとときとなりました。



場所を移動して農作業体験の時間です。こちらの畑では黒豆の植え付けのため、湯浅さんがその説明をされました。畑の隅で育てられていた苗を定植していきます。



60 cmの長さに揃えた棒を使って間隔を測り、3列の畝の黒いマルチシートに手際よく穴をあけていきます。そこに苗を植え付け、水进行る作業を受講生たちは経験できました。



写真左下は追肥の様子です。バケツにたっぷり入れた肥料を、マルチシートのすき間から苗の周囲に補充していきました。

そして写真右下は、すぐ隣にある畑で行う作業の説明をしているところです。



ニンニクの収穫の方法を受講生に向けお伝えしている様子です。抜き方、不要部分の切断位置、表面の皮の剥き方などを教わりました。



作業中は、エビの殻をむくときのように、皆が一度集中し始めると自然と静かになる雰囲気でした。環境事業協会の職員も、持参したマイはさみを使って作業を体験しました(写真右下)。



こちらは、焼き肉などを巻いて食べるサンチュの収穫の様子です。成長すると茎がどんどん伸びてくるため、葉は下の方から選んで収穫していきます。株元からスッと立ち上がった姿は、小さな木のような雰囲気でした。





ニホンアマガエル

これらは、この畑周辺で観察できた生き物たちです。受講生は農作業しながらも、こういった動く生き物が見つかったら集まって観察したりして夢中になっていました。

チュウゴクアミガサハゴロモは、カメムシ目ハゴロモ科に属する中国原産の害虫で、2017 年に大阪府で初めて発見されて以降、本州、四国及び九州の各地で発見され、2024 年には国内での農作物への被害が初めて確認されました。
(出典：植物防疫所病害虫情報 第 140 号)



カマキリ類の幼虫



チュウゴクアミガサハゴロモの幼虫

さて、お待ちかね昼食の時間です！羽釜の蓋をパカッと開けると中からは真っ白に炊き上がったふっくらご飯が☆☆☆ 2 升＝20 合分自家製のお米を使用されたそうです。



大きなしゃもじでカレーをかき混ぜたあと、受講生たちはそれぞれが持参した器に、自分でカレーをよそっていきました。

サラダも自分たちで盛り付けていきました。右下の写真は受講生の盛り付けの一例。サラダにかかっているドレッシングは自家製の玉ねぎソースとのことで、とても美味しく頂きました。カレーにはジビエが入っており、このお肉は害獣駆除で捕獲されたものを使用されています。



所属や年齢の異なる学生さんたちが集まる中、互いの垣根を越えて会話が弾み、交流を深める有意義で楽しい時間となりました。



食事の後は薪割り体験です！安全に配慮しながら行いました。作業方法をご指導いただいた後(写真右)、受講生も順番にチャレンジです！

一発で割るにはなかなか難しく、体力や集中力も必要とされることから、この体験では昔の暮らしの大変さを知ることができました。





次は、今回のメイン会場である「歌垣銀寄栗の森」へ移動です。
途中には、河川上流部に生息し落下昆虫や水生昆虫などを捕食するカワムツといった川魚などが普段見られるはずの、本来ならきれいな水が流れている用水路があります。しかし、この日は今朝までの雨の影響で水が濁り、水中の様子はあまりよく見えませんでした。それでも、草むらから飛び出して水中へ逃げ込むカエルの姿に、受講生たちは夢中になっていました。
この場所は、滋賀県の農村で見られる、湧水を利用した屋外の共同・家庭用の洗い場として、炊事や洗濯、野菜の冷却など生活用水の場に使われてきた伝統的な水利用施設「川端(かばた)」を思わせます。かつては、この地区にも同じような用水路が数多く存在していたそうです。



田んぼの中でも、さまざまな生き物が動き回る姿が見られました。左下の写真からも分かるように、受講生たちはその様子にたいへん興味深そうでした。
右下の写真は、湯浅さんが歩きながら、この能勢町歌垣地区のいわば観光案内をしている場面です。



左下の写真は、銀寄栗の基準となる標本木があった栗園について説明を受けている場面です。その後、歩き進めると道路脇に綺麗に咲くホタルブクロを見つけました(写真右下)。ホタルブクロという名前は、子どもたちが袋状の花の中にホタルを入れて遊んだことに由来するとされています。



そして、いよいよ今回の講座のメイン会場である「歌垣銀寄栗の森」に到着しました。



※ホタルブクロ
キキョウ科の多年草で、初夏に大きな釣り鐘状の花を咲かせる。開けたやや乾燥した草原や道ばた、山野の林縁などによく見られ、山間部では人里にも出現する。

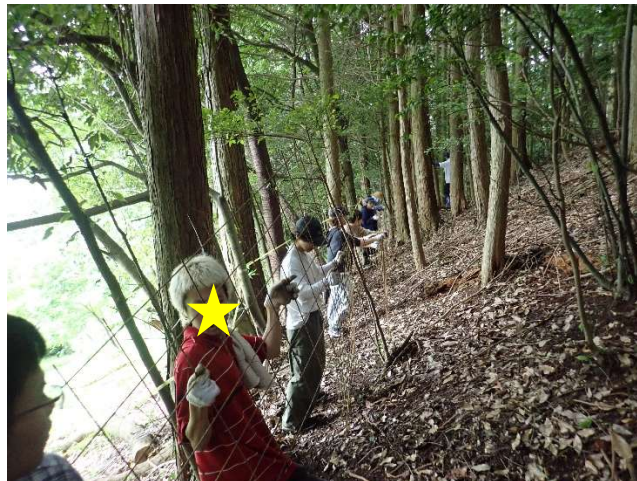
ブルーシートを広げて荷物を置き、ここで行う活動・作業の手順を聞いている様子です。写真にも写っている金網を使用して、防鹿柵を設置します。近年、獣害が後を絶たず、侵入を阻止するために2mの長さのある金網 100 枚と、支柱、樹脂製の防獣ネットを使用します。



スタッフを含め 20 名がこの講座に参加していたため、2～3 メートル間隔で一列に並びバケツリレー方式で、仮置きしている資材を設置予定地の奥へと送り込みました。その結果、重い資材を持って長い距離を歩き回る必要がなくなり、自分の持ち場で少し左右に動くだけでよいので、作業をかなり効率的に進めることができました。



左下の写真のように、坂道になっている箇所では危険を伴うため、間隔を狭めて配員するなど、工夫をして進めました。人数が揃っていないとできない事でもあるので、活動地の人手不足や担い手問題を今後の活動で知っていく中で大きな経験となったと思います。



作業の合間には栗園内斜面にある湧水溜池に、受講生たちが何やら集まっていました。近隣より移植された希少種が、去年の講座時に引き続き今年もたくさん繁茂していましたが、受講生たちはその貴重さに気付いたようです。



適宜休憩中に栗の木の周辺で楽しそうに談笑していたのでカメラを向けてみました(写真左下)。右下の写真は、ケースの中に入っている活動地の方が捕まえたノコギリクワガタをはじめとした甲虫類を、集まって見ている様子です。



さて、金網の配置が終わると、次は杭打ち作業です。金網は端のマスを隣の金網と1マスずつ重ね合わせたくて設置した杭に固定していくため、まずは必要な箇所へ杭を運び、所定の位置に配置していきました。



そして協力し合って専用の杭打機で杭を立てていきます。



杭と金網は、結束線を使用して縛り付けて固定し、ネットもその上から張って固定していきます。下の写真は一通りの作業が終わった風景です。お疲れ様でした！



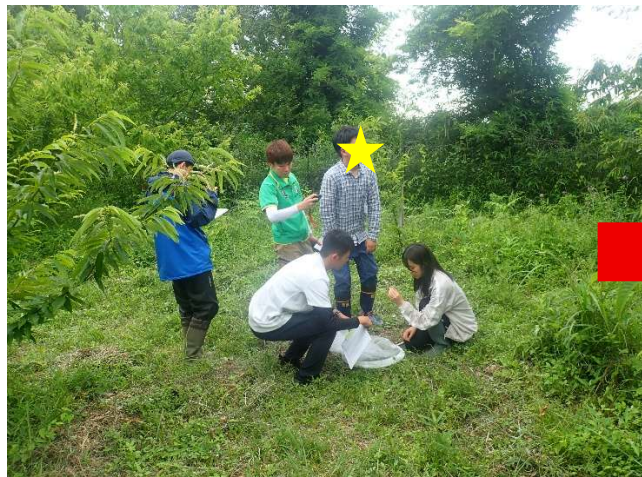
夕方になり、飛翔したす樹上のキマダラルリツバメを探します。
今年の講座では翅が傷んだ個体ではありましたが、あっさり
見つかり、そこから撮影大会がはじまりました。

下の写真は受講生である学生さんが一眼レフカメラで
撮影したもので、とても綺麗に写っていたのでご紹介します。
オスの表面の翅は、名前にルリという文字が入っている
ように青く鮮やかで、裏面は黒・黄色のまだら模様になっています。
まさにこの地のシンボル種にふさわしい風格をしています。



左の写真のように、キマダラルリツバメと密接な
関係にあるハリブトシリアゲアリも観察すること
ができました。キマダラルリツバメは、卵から孵
化した幼虫が自ら樹上のハリブトシリアゲアリの
巣へ入り、幼虫のまま越冬した後、蛹になるまで
アリに育てられるという、たいへん興味深い生態
をもっています。

こちらでは、網で捕獲した別のチョウを観察しています。ヒカゲチョウの仲間であるナミヒカゲです。



ナミヒカゲ

すぐ近くの栗の木を目線の高さくらいにある樹液のレストランには、スズメバチや複数のナミヒカゲの姿がありました(写真左下)。この時期のスズメバチは近づいても警戒心が薄い感じでした。



ナミヒカゲ

コガタスズメバチ



ミドリヒョウモン



イチモンジセセリ



オトシフミ類の作ったゆいかご

それ以外にも、受講生たちは普段見られない上記のような生き物をたくさん見られて、有意義な時間を過ごすことができました。



ナキイナゴ

アンケート用紙に感想などを記入いただき、ふり返りの時間です。3名ほどに発表して共有いただきましたが、内容については後程少しご紹介いたします。



その後、元来た道に戻り、母屋を背景に参加者全員で記念撮影を行いました。農作業や防鹿柵の設置など、互いに協力しながら活動したことで、達成感を共有できる講座となり、参加者にとっても良い思い出になったことと思います。



活動地での最後は、お世話になった方々に向かって皆でお礼を言いました。大変お世話になりました、ありがとうございました。受講生はバスで出発地点の長堀橋まで戻り、解散となりました。天候にも恵まれ、自然の中で学びと体験が詰まった充実した一日となりました。皆さん、本当にお疲れ様でした。

■受講生の声 ～環境マインドの向上を実感～

受講生に書いてもらったアンケートの自由記述から、印象的な感想をいくつかご紹介します。まず、多く見られたのが、環境保全への理解や意識が深まったという声です。

- ・能勢は大阪から少し離れただけで、あまり見ないような生き物がたくさんいて見るのが楽しかったです。このような場所を守っていくためにも、いろいろな場所で活動していきたいと思いました。今回の活動では農業がメインだったので、次は保全活動をしていきたいです。

- ・より一層環境保全に興味が湧きました。特に印象に残ったのは防鹿柵の設置です。現地で行うことで設置の大変さや現地の声を実感し、今後の環境活動に生かしていきたいです。

- ・実際に絶滅危惧種を観察し、畑作業を手伝うことで自然の尊さと、それを守っていく活動の大切さを学びました。環境保全に携わる皆さんのおかげで貴重な体験ができ、興味がさらに深まりました。

また、人と自然との関わりや里山の価値について考えるきっかけになったという意見もありました。

- ・栗園を維持・管理することでキマダラルリツバメなど希少な生きものの生息環境が守られているという、人間がつくり出す二次的自然の重要性を改めて感じました。また、保全活動を継続するための人材確保や獣害対策など、現場が抱える課題も肌で感じる事ができました。

- ・獣害について知っているつもりでしたが、知らないことばかりでした。鹿がかわいそうという単純な話ではなく、獣害対策の意義や難しさを知ることができました。

農作業や保全活動を実際に体験したからこそ得られた気付きも多く寄せられています。

- ・自然いっぱいの中で皆さんと一緒に体を動かして活動でき、とても楽しかったです。防鹿杭の打ち込みやキマダラルリツバメの観察を通して、生きものと共存することの大変さや素晴らしさを改めて感じました。

- ・実際の体験を通して農家の仕事の大変さや人手不足の現状を知ることができました。またボランティアに参加して、農業についてもっと学びたいと思います。

そして、能勢ならではの自然や生きものとの出会いも、多くの受講生の心に残ったようです。

- ・自分が見たことのない虫がたくさんいて感動しました。その感動を次の世代にも味わってほしいと感じました。

- ・栗林で見たキマダラルリツバメが本当に美しく、見とれてしまいました。

もちろん、体験そのものを楽しんだという声も数多く寄せられました。

- ・にんにく狩りは想像以上にはかどりと、薪割りは思っていたより難しかったです。ため池や水路にも感動しました。無農薬のお米やジビエ料理がとても美味しく、何度もおかわりしてしまいました。

- ・カレーや玉ねぎソース、とれたてのキュウリもとても美味しかったです。また地黄湿地にも行きたいです。

このように、自然観察や農作業、環境保全活動を体験したことで、自然の魅力だけでなく、里山を守ることの意義や課題についても理解を深めた受講生が多く見られました。また、「今後も活動に参加したい」「環境保全に関わっていきたい」といった前向きな声も多く、本講座が受講生の環境マインドの向上につながったことがうかがえる結果となりました。

また、「本日の講座のどんなところが良かったですか？」という質問には、次のような感想が寄せられました。まず多く見られたのは、普段の生活ではなかなかできない体験ができたことを評価する声です。

- ・ 普段できないようなことをたくさん経験できたところ。
- ・ 移動をしながら様々な体験ができたこと。自然の中で美しい風景を眺めながら食事ができたことや、防鹿柵を何も無いところから設置するという経験ができたことが良かったです。五感で学べる体験が素晴らしいと思いました。
- ・ 防鹿柵の設置やニンニクの収穫、黒豆の植え付けなど、普段は経験することのできない活動をたくさん体験できたことが良かったです。

また、大学での学びと現場での体験が結び付いたという感想も寄せられました。

- ・ 私は大学で環境について学んでいますが、普段の授業内容とつながる部分が多く、実際に現場で体験したことで理解がより深まりました。

さらに、参加者同士の交流について評価する声もありました。

- ・ 全員で協力して作業を行い、最後には円になって同じ食事を囲むという内容が、参加者同士の仲を深めることにつながり、初回講座にふさわしい内容だと感じました。

このように、普段はできない体験を通して五感で自然を学べたこと、座学で得た知識を現場で体感することで理解が深まったこと、そして参加者同士が協力しながら交流を深められたことなど、本講座ならではの魅力が受講生の満足度につながったことがうかがえました。

今回の講座が、受講生の興味・関心をさらに深めるだけでなく、「次も参加したい」「環境保全に関わってみたい」という一歩につながるきっかけになれば、事務局としてこれほど嬉しいことはありません。そうした期待を胸に、次回以降の講座についても引き続き内容の充実を図ってまいります。